

「グループホーム花みずきに伺って」

クリニック看護師 宮岡 直美

田園風景に囲まれ、自然豊かな環境にあるグループホーム「花みずき」は、地元の方々のご理解も得、平成 13 年 11 月に設立しました。

月に 2 度、クリニックから看護師が交代で 2 名ずつ訪問しています。その時間帯は利用者さんにとって、昼食がすみ午後のゆったりと時間の流れるときです。3 つのユニットがありユニット毎に扉を開けると、それぞれの利用者さんの個性を生かした、展示物などが廊下にあります、私たち訪問者を暖かく迎えてくれます。ほほえましくなる光景です。そして、和やかな音楽や、利用者さんにとって懐かしい音楽の流れるホールが中央にあります。ホールには、寒くなってくると日向ぼっこがしたくなるような、暖かな日の差す大きな窓があります。

伺った時、ホールでは、ちょうど 3 時のお茶の時間、世話好きの A さんは、「あんたも、これ飲んで！」と自分の飲みかけたお茶を差し出して下さいます。断るわけにもいかないし、どうしようかなあ(><)と私が、少し困った顔をしていると、スタッフがさっと察知して配慮してくれます。

訪問時は、心電図や採血などの医療的な検査の必要な利用者さんもあります。利用者さんのほとんどは、共同生活の送れる方なので、検査もスムーズに行えます。しかし、先日最期を迎えられた B さんは、かなり大変でした。いつも看護師に対し警戒心が強く、血圧を測る時の聴診器を目にするとう「やぶ医者！！帰れ！」と大きな声を出されました。スタッフの協力によって何とか検査ができる日もありますが、検査ができない時は、無理をせずに検査は見送ることにしていました。それは、私たちが訪問中に無理強いすることによって、夜からのケアにマイナスの影響がある事が多いからです。

B さんの最期のお別れの時、ご家族が「入居時からお部屋へ入れずホールで寝た事もあり、スタッフの皆さんにはかなりご苦勞をかけた。」と、大変だった思い出話を涙ながらにお話して下さいました。私たちの知らない苦勞が、「花みずき」では数多くあることを改めて知りました。

認知症の程度に差はあります。訪問中、不穩を訴え、施設長の部屋へ何度も足を運ぶ利用者さんに施設長は、利用者さんの不穩に対しゆっくりと対応します。しばらくするとその利用者さんも納得されてユニットへ戻られます。

「的確な対応ですね～。」と私が感心していると、その利用者さんは、事務所に日に何度も通い詰められる時もあり、施設長がユニットへ呼び出される事もあると聞きました。

院長がいつも、「入居者の人は、皆、それぞれに役割を持って生活されている。」と言います。ある日の夕方に長女を連れ(当時 13 才)立ち寄った時のことです。利用者さんの夕食はもう終わっている時間でした。しかし、ユニットのホールでは 100 歳の C さんが夕食の介助を受けておられました。スタッフはもちろんのこと、利用者さんの D さんが「はよお食べよ。」とスプーンにて介助しておられました。長女は子供ながらに、「みんなお世話されながら、お互いのお世話をしているんやね。スタッフの人も焦らず、おばあちゃんが食べるのを待ってあげて優しい雰囲気やあ…」と感動していました。日頃、訪問しても気がつかない温かなひとこまを見た気がしました。D さんも 100 歳の C さんのお世

話をすることで、生き生きとされていました。

利用者さんには一人一人役割があり、スタッフも利用者さんのそれぞれの個性を生かした対応をし、認知症の方の共同生活が成り立っています。

今後も「花みずき」へ伺うときは、施設長やユニットのスタッフからの情報をもとに、的確な訪問をし、利用者さんが安定した生活が送れるよう健康管理に努めていきたいと思えます。